

## さけ・ます資源管理連絡会議の概要

いしくろ たけひこ  
石黒 武彦（企画課連絡調整係長）

当センタ-では、私どもが行う業務に対するニーズの把握、成果の発表などを目的に、昨年8月30日札幌市において、さけ・ます資源管理連絡会議（以下連絡会議）を開催しました。連絡会議には、さけ・ますふ化放流事業に関係する国や道県の行政機関、試験研究機関及び民間増殖団体などから114名の方々に出席を頂きました。

主催者を代表して大西理事長が挨拶し、来賓を代表して水産庁栽培増殖課奈良課長補佐から挨拶を受け、薫田総括部長を座長に以下の話題を提供し、質疑応答を行いました。

1. 中期計画の概要等について
2. 近年のサケ資源の来遊状況について
3. さけ・ますふ化放流について
4. さけ・ますの系群保全
5. 耳石温度標識放流の現状と今後の展開

また、センタ-業務に対するニ-ズを把握するため、アンケート調査への協力を依頼しました。

連絡会議の内容やアンケート調査の結果については、当センタ-ホームページで公開しております。また、センタ-中期計画については本紙7号に、耳石温度標識放流については2号と7号にも掲載しておりますので、詳しくはそちらをご覧ください。ここでは、議題2の中の「来遊資源の推定方法」と議題3の中の「増殖効率化モデル事業中間報告」について、その概要をご紹介します。

### 来遊資源の推定方法

わが国のサケ資源の適正な評価と管理を目指して実施しているデ-タベ-スの活用例として、サケ来遊資源の推定方法を紹介しました。

来遊数の推定には、低年齢魚の来遊数からその後の来遊数を推定する方法が一般に用いられています。しかし、近年では8年魚での回帰がみられるなどの高齢化が進み、この方法では、推定値と実績に大きな差が生じるようになっていきます。そこで一般的な推定方法のほか、これを補完する方法として、来遊数と体サイズやカラフトマス豊度とサケ豊度に観察される相関性、年級群毎の回帰率の変動幅にみられる周期性などに着目した推定を試みました。その結果、い

ずれの方法においても平成13年秋のサケ来遊数は総じて前年を上回ると推察されました。

### 増殖効率化モデル事業中間報告

本事業は、少ない放流数で現状の来遊資源を維持することによる増殖コストの低減の可能性を検討するため、稚魚の放流時期と放流サイズの違いにより、サケの回帰率がどの程度変化するかを調べるものです。

放流時期と放流サイズの異なる2群の標識稚魚の放流は、北海道の12河川において平成13年春をもって終了しており、現在は標識魚の確認を中心に事業を実施しています。

これまでに確認された回帰標識魚は、平成11年に114尾、平成12年に3,146尾の合計3,260尾となっています。既に4年魚まで回帰している平成9年級群について、確認された尾数の多寡と、放流時の沿岸水温及び平均体重の違いの関連を見ますと、以下の3点が認められます。

1. 水温5 以上で1.0 gと1.5 g以上で放流された群（4組）では、すべてで1.5 g以上群が1.0g群よりも多く標識魚が確認されています。
2. 水温5 以上で1.1 gと1.3 gで放流された群（1組）では、2群間の標識魚確認数にはほとんど差は見られません。
3. 水温5 以下で0.7 gで放流された群と、水温5 以上で1.1 g以上で放流された群（7組）では、7組中4組で1.1 g以上群の方が0.7 g群よりも多くの標識魚が確認されています。

当センタ-では、標識魚の確認を平成12年級が5年魚で回帰する平成17年まで継続することとしており、これら回帰結果を踏まえて本事業のとりまとめを行う予定です。

本年の連絡会議は、昨年と同じ時期に開催する予定です。当センタ-では、関係者が一同に会する連絡会議を関係者のご意見やご要望をお聴きできる貴重な機会と考えております。ご多忙な時期とは思いますが、引き続きより多くの方々にご出席して頂きたいと思っております。